酒々井町

郷土研究会会報

第１３０号

平成20年10月1日
酒々井町郷土研究会
広報部

千葉氏四百六十余年の歴史を概観する（二）

浜口　信義

第四期　長禄元年（一四五七）～

馬加康胤の養子となった岩橋殿輔胤（のりたね）が千葉宗家を継承して子息の孝胤と文明年間（一四六九～一四八六）に本佐倉城を築き、佐倉千葉氏の時代をつくった。

文明十一年（一四七九）上杉氏と古河公方が和睦（これたね）したが、孝胤は宗家回復を目指す自胤が関係しているので反対して上杉氏家臣太田資長（道灌）及び自胤軍と境根原（柏市）で戦うが敗れた。翌年、臼井城（っしょ）の合戦で、城守備軍の反撃で太田図書（道灌の弟）以下討ち死にして上杉軍は撤退した。佐倉市臼井に太田図書の墓がある。

第五期　弘治三年（一五五七）～

弘治三年千葉親胤（ちかたね）が家臣に殺され、胤富（たねとむ）が森山城（香取市）から本佐倉城に入り、千葉宗家を継承した。

因みにこの事件の三年後の永禄三年（一五六〇）に織田信長が桶狭間で今川氏を破っている。

胤富の約二十年は、小田原北條氏に敵対する安房里見氏と同盟を結び関東進出を図る上杉謙信との戦いで、一進一退の戦況であった。

胤富の子の邦胤は天正十三年（一五八五）家臣に殺され、その後は北條との間は同盟関係から従属的関係へと変化した。

康胤―胤持―輔胤―孝胤―勝胤―昌胤
―利胤―親胤―胤富―邦胤―重胤―直重

天正十七年（一五八九）には北條直重が千葉氏の名跡を継いだが、翌年豊臣秀吉の小田原城攻略により、本佐倉城も不戦開城した。最後の宗家当主の重胤は江戸へ出て浪人していたが、寛永十年（一六三三）病死したといわれ、一族の多くは下総の地に帰農した。

まとめ

① 鎌倉幕府の執権「北条氏」と「小田原北条氏」とは血縁関係は無い。小田原北条氏の初代北条早雲の本姓は「伊勢氏」で、伊勢新九郎という。

② 千葉氏は執権北条氏のもとで隆盛となり、小田原北条氏のもとで滅亡した。

③ 武士団としては、関東随一の名族で、将軍や関東公方に一目置かれる存在であった。

④ 下総の国の守護大名として室町幕府の将軍や古河公方に従うが、それを乗り越えるということができなかった。即ち、関八州を公方に代わって支配しようとしなかった千葉氏は一武士団という立場を守り通した。

関東を自己の勢力下におこうとした管領上杉氏と小田原北条氏とは当然の争いとなり、上杉氏には安房の里見氏がつき、小田原北条氏と千葉氏が同盟を結び、互いに上総、下総で攻防を繰り返した。小田原北条氏とは当初は同盟関係にあったが、のちは配下にはいった。小田原北条氏との関係でも遂に主導権を握ることができなかった。これが千葉氏の滅亡の一因である。

⑤ 本佐倉城の不戦開城は酒々井を戦火から守ることになり、また記録上は本佐倉城および酒々井の地は戦火にあっていない幸せな地域である。

⑥ 長い千葉氏の歴史を物語る諸道具類や文書類は、千葉氏宗家の胤（たね）直（ただ）が千田庄で自害した戦乱での消失と、秀吉の命令による本佐倉城の建物の取り壊しにより消失したのではないかと考えられる。

⑦ 千葉氏の一族はほぼ全国に散在し、苗字にその土地の名を冠して使用している場合が多い。またお互いに連携することもなく独立した存在である。

（完）

郷土史講座「酒々井のあけぼの」感想

川島　邦彦

旧石器時代の二万七千年前、酒々井町に生活者がいたことが確認されています。近隣の遺跡からナウマンゾウの化石が出土したことなどから、人間を含めて動植物が育ちやすい豊かな環境にあったということでしょう。印旛沼や高崎川周辺を狩猟する先人の姿が想像されます。そして、狩猟時代を連想させる原風景が酒々井町全域に残っていることに驚きと感動を覚えます。

石器は、千葉県内に石材が少ないことから関東各地域を調達先としていたとのことでした。広域移動は容易でないと思われる中で、交易が行われたのか、搬送はどのようにしたのか、石材調達先で加工もおこなったのかなど、興味は尽きません。

また、生活を維持する道具とした石器の用途だけでなく、中にはペンダントや絵画のような装飾品も出土するとのことです。生きること自体が厳しかった時代に、実用品ではない「癒し系」加工品の存在に微笑ましい人間味を感じます。

日常生活の中で私たちは、数万年単位で歴史を振り返る機会は少ないと思います。しかし、長い時間軸での氷期（寒い時期）と間氷期（暖かい時期）の気候変動は平均気温に七～八度の差があり、これらの自然現象は動植物生息の分布を変化させてきました。旧石器時代の温暖化サイクルによって人類の活動が活発になったこと、また宇宙が誕生した百五十億年前から現在までを三百六十五日のカレンダーにすると、人類の誕生日は十二月三十一日午後である旨の説明を聞くと、私たちの人為的温暖化はあまりに速過ぎると感じます。そして、温暖化と引き換えにした現在の物質的豊かさには「足るを知る」思いを強くしました。

郷土史講座

「酒々井のあけぼの」の訂正と補足

酒井　弘志

去る八月二十四日、中央公民館での郷土史講座「酒々井のあけぼの」におきましては、休日にもかかわらず多数お集まりいただき誠にありがとうございました。

最近では本佐倉城跡を中心に仕事をしているため、私自身ひさしぶりに自分の専門分野（旧石器）にふれることができ、非常に新鮮でまた良い刺激となりました。このような機会をくださった郷土研究会に感謝いたします。

さて、恥ずかしながら・・・

この前の講座中、皆様からの質問「人類最古の石器はいつぐらい前のものか」に答える中で、私もうろ覚えで「一〇〇万年より古いものは無かったと思います」と答えてしまいましたが、調べましたところ大変な間違いであることに気がつきました。そこでこの場をお借りして、お詫びを兼ねまして、訂正と補足説明をさせていただきます。

現在世界最古の石器と言われていますのはエチオピアのゴナ遺跡から見つかっている二六〇万年前のものです。猿人が使用していたと考えられる石器で、こぶし大の丸い石の片側を打ち欠いて簡単な刃をつけたものです。しかしこの石器については諸説ありまして、まだ世界最古の石器として認定していない研究者もいるようです。

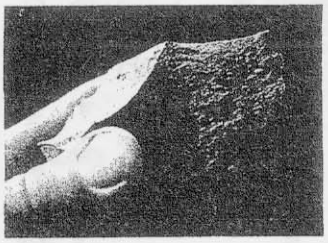
こののち、石器として確実なものは約一五〇万年前に登場します。精緻な加工を施した洋ナシ形をした握斧（ハンドアックス）と呼ばれる石器を使用した文化がアフリカに登場し、ヨーロッパや西アジアなどにも広がり、約二〇万～三〇万年と長く続きます。ここまでは間違いなく人類の石器は遡ることができると言えます。

ここからあとは猿人↓原人↓旧人↓新人と人類の進化に伴い石器も進化してゆきます。そして現在の我々に近い新人の段階では精巧かつ様々な機能を持った多くの石器を作り、生活を行っていたことはこの前の講座内でお話したとおりです。

最古の石器については、その認定については、慎重に考えなければなりませんが、人類史や考古学における究極かつ魅力ある課題という事ができます。が、しかしその一方で「旧石器捏造」という悲しい事件がおきてしまったことも事実です。

2003.10.27（月）読売夕刊

最古の石器



＊エチオピアで260万年前

エチオピアで発見された人類最古の約260万年前の石器（米南コネティカット州立大提供）

【ワシントン＝笹沢教一】米・南コネティカット州立大などの国際発掘チームが、エチオピア北部で約二百六十万年前の人類最古の石器とその使用跡を発見した。

数百個の石器群と解体された獲跡を残す動物の骨がまとまって見つかり、ヒトの文化の起原とされる肉食の始まりを示す重要な発見として注目される。人類進化学の国際専門誌「ジャーナル・オブ・ヒューマン・エボリューション」最新号に発表した。

発表によると、発掘チームは、同国のゴナ川支流域の一か所から、石同士をたたきつけて作った剥片石器と石器で傷つけられた跡のある獣骨を発見した。石器はナイフとして動物の皮や肉を切ったり、骨を割って中の骨髄を取り出すのに使われたと推定されている。

ゴナ川地域からは、最も古いとされた約二百五十万年前の石器が発見されている。今回の石器はさらに十万年さかのぼるが、これまで、石器と獲用痕のある骨が一緒に見つかることはなく、石器の使途や信ぴょう性をめぐって専門家の意見が分かれていた。

この石器を使用した人類の化石は見つかっていないが、ほぼ同時代に生息していた猿人の一種「アウストラロピテクス・ガルヒ」などが考えられる。人類は石器の使用を始めたことで、栄養価の高い肉食が可能になり、石器文化の獲得とともに脳容積も飛躍的に増大したと考えられている。

馬場悠男・国立科学博物館人類研究部長の話「今回の発見で、最古とされる石器によって、どんな動物が解体され、食されていたのかがわかり、謎に包まれていた石器の特徴が詳細にわかってきたことは興味深い。年代が古くなったことより、石器がどう使われ、食文化をどう獲得したかを探る上で有意義な発見だ」

高野台観音堂を拝観して

大沢　博

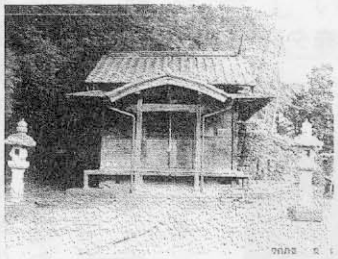
墨の丘陵地の奥まった高野台という所に静かに鎮座する観音堂がある。野草観察の傍ら案内されて立ち寄ったこの小さな観音堂に懐かしい故郷の情景を思い出させる雰囲気があった。お堂を管理しているという地元の長老と偶然出会い、いろいろお話を聞くことができた。

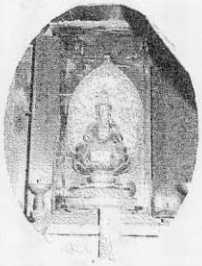
お堂内拝観も了承頂き、直接観音さまを拝観することができた。正面の蓮華座には、金箔も鮮やかで江戸中期のものと思われる聖観音坐像が鎮座していた。また、不思議なことに二度目に訪れた時も前出の長老とお会い出来、観音さまの「現世ご利益」を感じるものであった。

「妙法蓮華経観世音菩薩…」。。。

お堂内には、近年、昭和三十四年と五十五年の二度の改修の記録が残されており、屋根は焼瓦になっていた。又、境内には、東伝院二十世天羽大和尚謹書の「讀誦普門品壱万巻」の石碑があり、東伝院下寺を印象付けるものであった。

周知の通り聖観音は、十一面観音、千手観音、馬頭観音、如意輪観音など三十三の姿に変化して衆生を救ってくれると言われている観音さまである。こんな静かな奥里に今も里人を見守る観音さまが在所する有難さ、普段意識することがなくても観音さまはいつも変わらず私たちを見守ってくれているのである。





高野台観音堂と聖観音坐像

入口横には、酒々井ではあまり見かけないムクロジの高木が白い花を咲かせていた。秋になると黄褐色の皮をかぶった固い実が付き、皮はサポニンを含み昔から石鹸の代用に使われ、中の黒い種子は羽子板の球に使われていた。また、同じムクロジ科の木でこれによく似た「モクゲンジ」という木が寺院の境内によく植えられていたが、こちらは、同じ黒い球でも「数珠」に使われていたものである。

野草観察の傍ら近隣の神社やお寺などに立ち寄りこうして土地の人の話を聴いたり、建造物や石碑を見て往時を偲ぶのは本当に楽しく人間の原点を覗き見る気がする。

この活動環境を与えてくれた周囲の方々や神仏に改めて感謝を捧げたい。

《観察メモ》

「チダケサシ」

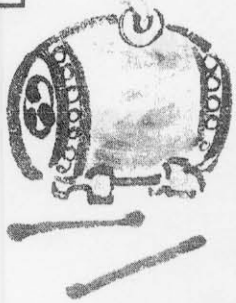
（ユキノシタ科）

本州から九州のやゝ湿った山野に生える多年草。花期は、六月から八月、花序は茎に直立または斜上し淡い桃色の小花を多数つけます。

和名の乳茸さしは、中部地方の山村でこの草の茎に食用キノコの乳茸をさして持ち帰る習慣があった事からです。

酒々井では総合公園などに自生しています。緑豊かな自然をいつまでも残すためにも見守ってほしい植物の一つです。

見学案内



日帰り見学会

十月三十日(木)雨天決行

千葉方面

千葉氏の居城、本佐倉城跡も国の史跡指定をうけて、はや十年となります。

ここに来る前の居城であった亥鼻城跡付近や千葉氏ゆかりの名所などを散策します。

千葉寺・・坂東札所三十三か所の第二十九番札所で、和銅二年行基の開山と伝えられ、千葉氏代々の祈願所として栄えた格式の高い寺です。

千葉市立郷土博物館・・四層五階建ての白い建物で、亥鼻城の復元ではなく、小田原城を模して建てられたものです。五階からの展望は素晴らしいです。

七天王塚・・牛頭天王（ごずてんのう）を祀る千葉氏の守護神で妙見尊（北斗七星）を現しています。また、将門の影武者の墓とも言われています。

千葉神社・・北斗山尊光院金剛授寺。

千葉氏はその守り神として尊崇し、元服などの儀式はここで行ったとされています。

明治維新の神仏分離に際して千葉神社となります。

天御中主命（あめのみなかぬしのみこと）などを祀っていますが通称「妙見様」と呼ばれています。

名勝探訪

十二月三日(水)雨天決行

江戸東京博物館方面

江戸の粋、両国にある江戸東京博物館を見学します。江戸から明治・大正・昭和の東京について人々の生活・文化を豊富な実物資料や精密な復元模型などでたどることができる博物館です。

今回はゆっくりと見学していただくため、自由見学とし、ここで解散します。

訃報

前顧問の沖田善三郎氏には、かねてより病気療養中のところ、九月十一日ご逝去されました。（享年八十四才）長らく郷土研究会の発展にご尽力いただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします

あとがき

早いもので北京五輪が終了して一カ月余が過ぎました。日本は合わせて二十六個の健闘ぶりでしたが、陸上四百メートル・リレーで八十年ぶりにメダルを取った四人組の一人が当酒々井町在住の高平慎士君です。あのスピードには驚きました。

平成二十年は本佐倉城跡が国史跡に指定されて十年目でこれを記念して講演会があり、また、史跡を訪ねるウオーキングもあり、郷土研究会も史跡案内を担当します。

十二月には江戸東京博物館で一日ゆっくり江戸時代の生活をしのびます。皆さんお出かけください。

＜郷土研日誌＞

月日	内容	参加者
6.26	会報印刷	4
6.28	会報発送(129号)	14
7.15	勉強会	14
8. 6	名勝探訪・下見（新宿御苑方面）	2
8.19	会報編集会議 研修部会	4 7
8.24	郷土史講座（「酒々井のあけぼの」）	60
8.29	運営委員会	17
9. 6	史談会（和田のむかし⑬）	11
9. 9	名勝探訪（新宿御苑方面）	32
9.11	会報編集会議 野草観察会・下見	4 5
9.19	会報編集・校正	4
9.24	会報最終校正	4

郷　土　研　行　事　案　内

平成20年10月～12月

	１０　月	１１　月	１２　月
史　談　会	休　講	休　講	６日（土）　１３：３０ 中央公民館会議室 「和田のむかし」⑭ 講師：高橋健一先生

日帰り見学会

「千葉方面」

１０月３０日（木）　町バス利用　雨天決行

定員　３３名　参加費　２，０００円（食事代･入場料を含む）

集合時刻･場所　８：５０　中央公民館前広場

コース　中央公民館―千葉寺―亥鼻城跡（千葉市立郷土博物館・お茶の水･七天王塚）―≪昼食≫―千葉神社―臼井城跡―中央公民館

16：30頃　帰着予定　（場合によりコースに変更あり）

キャンセル　実施３日前まで、寺本　へご連絡下さい。

≪申込受付≫　１０月７日（火）　９：００～１０：００　公民館ロビー

【注】 *都合により町バス利用が取消されることがあります。その場合“日帰り見学会”は中止となります。中止となった場合は、参加申込者にその旨を直接連絡（電話等）いたします。*

名勝探訪

「江戸東京博物館方面」

１２月　３日（水）　雨天決行

参加費　１００円（資料代）。　別途、入館料が必要です。

集合時刻・場所　８：３０　京成酒々井駅・構内改札口前（階段上）

コース　京成酒々井駅―（東京メトロ）浅草橋―＜JR 乗替え＞―両国駅…旧安田庭園…江戸東京博物館　⇒　入場・解散（自由参観、自由昼食）

見学等　博物館では自由に参観し、昼食も各自で済ませお楽しみ下さい。そして、無事に酒々井へお帰り下さい。

急　告　文化協会主催の視察旅行は、１０月１６日（木）に決定

・場所：埼玉県秩父方面―丸木美術館、吉見百穴、岩室観音　他

・費用：７,０００円（昼食代､入場料等）

・申込：９月３０日までに、会長（岡田　利光　へご連絡下さい。

郷土研としてまとめて申込みます。詳細は、会長若しくは役員へご照会下さい。

郷土研トピックス！

★ 今年の郷土史講座は、講師に酒井弘志氏をお迎えし、「酒々井のあけぼの」という題で、旧石器時代と酒々井についてお話をして頂きました。町長ほか来賓の方々も熱心に聴講され、盛況裡に終了しました。

★ 昨年９月からほぼ一年間、会長・副会長が講師を担当した「ふるさとガイド養成講座」（公民館主催）がこの程終了しました。秋には酒々井町公認のガイドグループが発足し、活動を開始するそうです。

★ この秋、公民館主催のタウンカレッジ・歴史学習講座「しすいの歴史」（４回）が開講されていますが、会長・副会長が講師を担当しています。

★ 国史跡「本佐倉城跡（もとさくらじょうあと）」　指定十周年記念行事の一環として、“史跡ウオーキング”が実施されますが、郷土研メンバーも主要地点での史跡案内を行う予定です。